

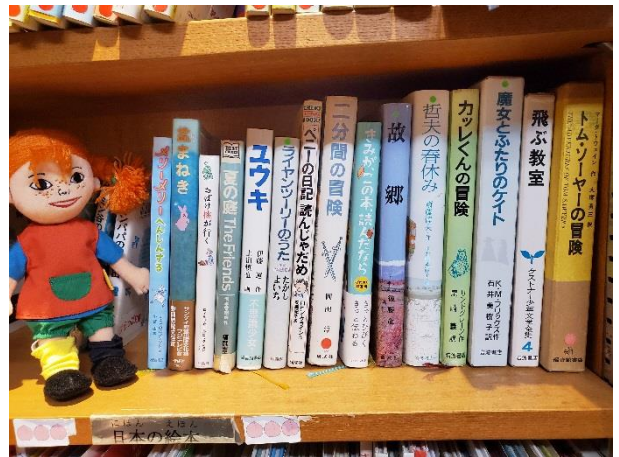
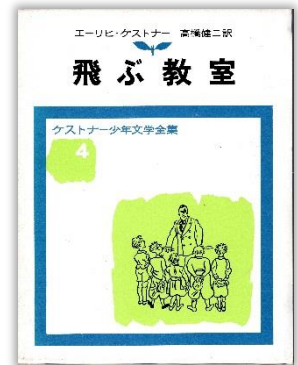
急にやってきたコロナのための自粛生活に、何もかもが中止になり、突然想像もしなかった巣ごもりの生活が始まりました。でも、今年70才になった私には、いつもの忙しい時間から開放され夫と二人で毎日のように散歩できる生活は、年にふさわしい生活のようにも思いました。

こんなとき、図書館が開いていたらどんなに助かるかと思いますが、幸い文庫をしているので、我が家には本がたくさんありました。

文庫の蔵書は主宰者がすべて目を通してから子どもに手渡すのが大切と聞いてはいますが、なかなか日々の忙しさと読めない本がたくさんあり、後ろめたい思いがありました。

そこで、このときとばかりに、いつも背表紙が「私を読んで！」と訴えているようで、気になっていた本を次々に読んでいきました。ほかに予定がないゆつたりした時間なので本の内容がスーッと入ってくるのに驚きました。「えっ！そんな本も読んでなかったの？文庫のおばさん！」といわれそうでお恥ずかしい限りですが、児童文学のすばらしさを再確認しました。30冊近く読みましたが、一番印象に残ったのは、ケストナーの『飛ぶ教室』（岩波書店）でした。

映画では見ましたが本はじっくり読んだことはありませんでした。



**文庫はお休み、3人の孫たちがお得意さん！**

文庫はクローズしていましたが、近所に住む孫たちが文庫を利用してくれました。

サッカー少年の中一は『ニルスのふしぎな旅』上下（ラーゲル・レープ作・福音館）、六年生は、『白狐魔記』シリーズ（斉藤洋作・偕成社）など読んでいました。そして3年生の女の子は、文庫でおはなし会をととても楽しみにしていますが、読書は日々忙しく



「かんばん」シリーズ全10巻  
宮川ひろ作 童心社

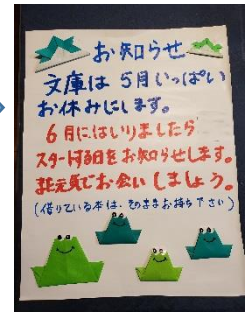
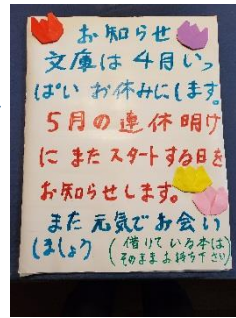
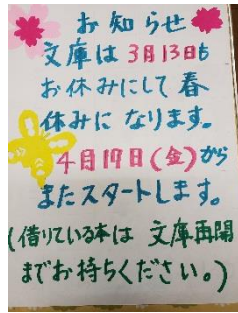
てなかなかじっくり取り組めないようでした。でも今回は、たっぷり時間があつたので、『かんばんシリーズ』（宮川ひろ作・童心社）を全部リュックにつめて、題名についている「あまのじゃく」ってなに？「ひいき」ってなに？といいながら借りていきました。夫が「あんなに借りて大丈夫かな？」と心配していましたが、すぐに読めたとのこと、本を返却するときに、ちょっとお姉さんになったようにみえました。そのあとも『ポリーとはらぺこオオカミ』のシリーズ（キャサリン・ストーン作、岩波書店）や『おばけやさん』のシリーズ（おかべりか作・偕成社）など読書を楽しんだようでした。



「ポリーとはらぺこオオカミ」シリーズ  
全3巻キャサリン・ストーン作 岩波書店

## それでも文庫

文庫は、閉じていましたが、どうしてもオファーがあったときは、3密を避けて、本の貸し出しをしました。図書館がしまっていて困りきっている大人の方、子どもに読む本がなくて困りきっている母親から頼まれると本は貸し出し、結局150冊ほどの本を貸し出しました。引越しに伴う本の返却や、100冊近い本の寄贈など、文庫は閉じていてもコロナ日記として記入した文庫ノートは数ページになりました。



## 語り手として

まず、「語る」ということから自分を解放したいという思いが強く、糸の切れた凧のようにふわふわとひたすら児童文学を読む日々でした。でもこんな自由な時間は、二度とないかもしれないとふと我に返り、かねてからこれだけはとっていた、宮沢賢治の『度十公園林』を覚え始めました。はじめはとても難しくて何度も断念しそうになりましたが、何とか4月・5月と継続して見つめ続けました。度十の家族の深い愛情、自然のすばらしさを誰よりも愛した度十、そして言葉の一つ一つに込められた賢治の思いが伝わり、この時期にこの作品に触れられることを幸せなことだと思いました。

公園に立ってじっと空をみあげると、風がどっと吹いて葉がきらきら光る時など度十の気持ちになっている自分がありました。25分の長編でまだまだ道半ばですが、いつか皆さんに聞いていただける日がくればいいなあと思っています。

## 交流はスマホで

昨夏、必要に迫られて買ったスマホでしたが、巣ごもりのなか、ラインやメールを通しての交流は本当に楽しくありがたいものでした。20人近い全国区の語りグループのやり取りでは、北から南から花の便り、お話の小道具をつくって製作した動画、読書紹介、お料理紹介とレシピのやりとりなど多岐にわたりました。また、コロナで全国のおはなし会や図書館がどうなっているかの情報も伝わりました。娘には、「シニアは、なかなかやるね！」と動画を送信すると感心されました。40人近い、友人や身近な人たちとのやり取りは、励みになりました。スマホの購入をすすめてくれた友人に感謝でした！

## おすすめの一冊

### 『夢見る帝国図書館』中島京子作 文芸春秋

上野にある国際こども図書館が、戦前の帝国図書館から国会図書館になるまでの話です。現在の図書館になるまでの上野の周辺の様子が歴史的に語られ、図書館自身が出入りした作家をずっと見つめ続けて語る形式ですが、そこに喜和子さんという女性の一生が織り込まれていきます。上野動物園の戦時中の猛獣毒殺の話や図書館の蔵書を信州に疎開させた話、また戦争中も一日も休まず終戦の日も開館していた図書館のことには驚きました。そしてラストがすばらしかったです。読後も喜和子さんの一生が心に残りました。

